法律相談 R4 ⑱

マエストロ 小松一彦先生の死を悼む

髙橋 司 たかはし・つかさ

弁護士。1963年生まれ。北海道大学大学院法学研究科修了。「髙橋・日浦法律事務所」代表。

私は中央大学に入学してすぐに管弦楽部に入部した。その音楽監督兼常任指揮者が小松一彦先生だった。小松先生はすでに若手指揮者として頭角を現していた。齋藤秀雄先生の門下で桐朋学園大学指揮科を卒業された後、NHK交響楽団を指揮して「幻想交響曲」で正式デビュー、西独ライン・ドイツ歌劇場副指揮者を経て関西フィルハーモニー管弦楽団の常任指揮者に就任していた。その後、昭和63年から平成3年まで札幌交響楽団専属指揮者に就任している。

管弦楽部では、小松先生のご紹介で一つひとつの楽器に東京都交響楽団、新日本フィルハーモニー交響楽団などからトレーナーが来て下さっていた。卒業・入学を繰り返して学生が入れ替わる大学オケでは、各パートのトップは先輩たちから2年間に亘り指導されて育成される。コンサートマスター(第1ヴァイオリン首席奏者)も同様であった。

私が2年になった頃、コンマスから「もし将来コンマスをやろうと真剣に考えているのであれば、大学の講義に出るのは諦めた方がいい。講義に出ながらコンマスを全うすることはできない」、「コンマスはいつも会室(練習会場のこと)にいることが当たり前だと自分は考えている。全てをオーケストラに捧げられるのかどうかを考えてみたらどうだろうか」と言われ、まもなく講義に出ることを止めた。その後、日曜日以外は午前8時30分ころに会室に来てから午後9時ころまでの間、会室の中や外で時間を過ごすこととなる。ただひたすら練習をした。1日中会室にいることで他のメンバー一人ひとりがどのような練習をしているのか、どのあたりが難儀しているのかなどを総譜片手に静かに見続けることができるようになった。先輩のコンマスが言ってくれたことが心にしみた。

その後、シンガポールでの演奏旅行から帰国してしばらくして、私は第24代コンサートマスターに就任した。就任するにあたり、小松先生から「君が弾けるのは当たり前。君の仕事は他の楽団員のレベルを上げることに集約される」、「アマチュアのオーケストラにはプロ並みの演奏技術とアマチュアらしいパッション(情熱)を期待している。そのどちらかが僕から見て期待できないものになれば、僕はその時からタクトを振らない」と指導された。実際に、リヒャルト・ワーグナーのオペラ「ローエングリン」の練習の際、コンマスにしか聞こえないように「このままでは僕は振らないよ」と言われ凍り付いたことを憶えている。

最後の定期演奏会の楽曲は、アントン・ブルックナーの交響曲第8番ハ短調(ノヴァーク版)に決まった。グスタフ・マーラーの交響曲第1番ニ長調「巨人」とルートヴィヒ・ヴァン・ベートーベンの交響曲第9番ニ短調作品125「合唱付き」との三択になったと記憶しているが、小松先生も中大オケは意外とブルックナーが似合っているのではないかと言ってくださり、この大曲に決定された。なお、「巨人」は平成3年にサントリーホールで、「第九」は平成11年にニューヨークのカーネギーホールで中大オケの後輩達が演奏している。

演奏会が近づくと、布団の中にヴァイオリンケースを入れて抱きかかえて眠るようになった。ヴァイオリンが身体の中に融けてゆく感覚があった。あれ以上、私には練習はできなかったと思う。小松先生には、よく「君は目では弾けているんだけどね〜。音がね……」と言われていた。

小松先生は音楽にはとても厳しい方であった。いまだに年に1、2度はコンマスの自分だけが弾けていない夢を見て目が醒めることがある。司法試験に落ちる夢はとうの昔に見なくなったが、オケの夢だけはいまだに見て寝汗をかく。私は小松先生から大切なことを教わった。それは、1つのことを寝ても覚めても考え続ける「ひたむきさ」である。音は一瞬で自分の手元を離れていってしまうが、できる限りのことを事前にやり続ける大切さを私は小松先生と管弦楽部から学んだ。

小松先生の心電図、呼吸モニターの波形が次第に弱くなってきた時、奥さまが小松先生に愛用の指揮棒を握らせたそうである。その後、心電図の波形が次第にとぎれとぎれになり、やがて平坦になった。平成25年3月30日午前2時53分、小松先生は右手に指揮棒を握り、看護師さんが用意してくださった小さな花束を右脇にかかえ、この世界に一礼をしているようであったと聞く。心からご冥福をお祈りします。小松先生ブラボー!